

# 地域まるごとケアを考える

## 花戸氏が永源寺地区の活動を著書に

### 安心して最期を迎えられるまちへ

### 本紙読者10人にプレゼント

【東近江】東近江市永源寺地区で、地域に根ざした「地域包括ケア」や「在宅医療」などを中心に活動し、東近江市永源寺診療所（東近江市山手町）で所長を務める花戸貴司さん（44）の著書「飯が食べられなくなったらどうしますか？」がこのほど、一般社団法人山手漁村文化協会から出版された。

（土曜和紙）

外来診察する傍ら、ガンや認知症、寝たきり、若い、難病を抱えた子ともなく、現在、約八十人の在宅診療（往診）を行っている花戸さんは、訪問看護師やケアマネージャー、ヘルパー、薬剤師などのスタッフほか、家族やご近所さん、役所、社協の人たちと連携しながら永源寺地区の医療を支えている。

永源寺地域は、人口五千八百人、高齢化率は三十三パーセントを超える少子高齢化を迎えた山間農村地。在宅死の全国平均が一割強なのに対し、同地域では自宅で命を全うする人が半数にのぼる。

同書では、様々な形の在宅療養患者と、その最期を迎える人たちが

と携わってきた花戸さんが、身をもって感じた医師としての考えと、家族などの交流から感じた人としての素直な思いが鮮明に綴られている。

「病気が治らなくても元気に暮らす人たち」と題された第一章では、高齢化率が高い永源寺地区の現状が伝えられ、第二章「なぜ自分らしい死を迎えられるのか？」と第三章「住み慣れた家で最期を迎えるために」では、病を抱えながらも、自身に合った生活を送っている人たちの生活と、最期を迎える患者やその家族の様子を紹介している。第四章は、誰もが安心して最期まで自分の居場所を暮らせる、医療ケアを通じたまちづくりとして「永源寺の『地域まるごとケア』の歩み」が書き下ろされ、花戸さんが思うこれからの医療や介護に必要なことが記されている。



「飯が食べられなくなったらどうしますか？」を出版した花戸氏

また、永源寺地区の

風景や人々の生活、花戸さんが住民や患者と触れ合っているモノクロ写真（写真・國森康弘さん）が随所に載せられており、本文と連動して同書の内容を強く印象づける。

人生の最期を迎える時に、どのような医療や介護を受けたいのかという希望を踏まえ、外来の高齢者に「ご飯が食べられなくなったらいかがですか？」と声をかける花戸さん。「日々進歩する医療の一方、遠ざかっている老いや死と向き合うこ

との大切さ、生を全うするために、死をタプリーにしない話し合いと、自分がここで生活したいと願えば、それが叶うようなまちづくりが大切」と、同書を綴った思いを語る。

A5判二百七ページ。書店やインターネットで購入することができる。価格は、一千八百円（税別）。

なお、滋賀報知新聞社では、同書を読者十人にプレゼントする。希望者は、(1)「この飯が食べられなくなったらいかがですか？」希

望(2)郵便番号・住所(3)氏名・性別(4)年齢・職業(5)連絡先(電話番号・メールアドレス)を記入し、滋賀報知新聞社編集局「この飯が食べられなくなったらいかがですか？」係りへ、はがき(〒525-0001 5 東近江市中野町一〇〇五)かファックス(0748-22-8805)で受け付ける。締め切りは四月二十五日必着。当選者には本社窓口で同書を贈呈する。

## 東近江市観光協会 終戦70周年記念企画

### 陸軍八日市飛行場など 戦跡めぐり日帰りツアー

#### 団体対象に2コース設定

【東近江】東近江市観光協会は、終戦七十周年記念企画として、市内に残る飛行場跡地と掩体壕、その周辺の戦争遺跡を「語り部」の案内で見学する「消えた飛行場―陸軍八日市飛行場遺跡めぐり―」を団体対象に開き、随時募集している。

見学のモチ

ルコースは、中原神社と八日市飛行場正門前掩体壕（高さ五メートル、幅二十八メートル、奥行き二十メートル）、滋賀県平和折念館を巡るAコース（約二時間）と、太郎坊宮と中原神社、八日市飛行場正門前、殉国の碑、掩体壕、滋賀県平和折念館を巡るBコース（約四時間 昼食時間込み）の二コース。見学先の変更は可能で、平和折念館での平和学習講座もできる。

飛行場を中心とした戦争遺跡と平和折念館をセットで巡るAコースは、

東近江市は京阪神・東海地区から日帰り見学が可能な距離であり、身近な戦争遺跡を巡ることができ、魅力となっている。

料金は一団体Aコースが六千円、Bコースが九千円（ガイド料・遺跡などの見学費用・手配、配布資料など）。一団体の最大人員は四十人。

申し込みと問い合わせは、同協会（0748-48-2100）まで。